

加賀蒔絵

加賀蒔絵は、江戸時代（1603-1867）に加賀藩（現在の石川県と富山県）で作られた装飾漆器の一つである。金粉などの金属粉を柔らかい漆に塗り、絵柄を描く「蒔絵」の様式による、華麗な装飾が特徴である。

加賀藩は前田家が治めていた。江戸時代の経済の基礎であった米の生産量が豊富だったため、前田家は非常に裕福であった。前田家は、日本の優秀な職人を集め、必要とするものを提供し、文化の発展に投資した。17世紀初頭、前田利常公（1593-1658）は金沢城の近くに2人の蒔絵師を招いた。清水九兵衛（?-1688）は、江戸（現在の東京）の出身で、初代・五十嵐道甫（?-1678）は京都の出身である。二人は加賀蒔絵の代表的な作品を制作し、その技術を後継者に伝え、現在の金沢漆器の名声の基礎を築いた。

漆器は、漆の木の粘性のある樹液を塗ったものである。この樹液を何度も塗り重ね、固まるまでに十分な時間をかける必要がある。また、蒔絵を施すには貴金属が必要である。加賀蒔絵は、このように手間と費用がかかるため、富裕層しか手が出せなかった。そのため、加賀蒔絵の対象は支配階級の人々の趣味や嗜好を反映したものとなっていた。加賀蒔絵は、鞍（くら）、鐙（あぶみ）、鞘（さや）などの武具から、筆箱、茶道具などの生活用品に至るまで、その装飾は多岐にわたる。加賀蒔絵の装飾は、有名な和歌や民話の吉祥文様を連想させる、自然の情景を描いた華麗で複雑なものが多い。

加賀蒔絵は、複数の技法を組み合わせることで、質感や奥行きのある立体的な情景を表現することが多い。例えば、「肉合研出蒔絵」は、「研ぎ出し蒔絵」と「高蒔絵」を組み合わせた蒔絵技法である。研ぎ出し蒔絵は、漆と粉の模様を浅浮き彫りにして乾燥させ、その上に黒や透明の漆を塗り重ねる。さらに、文様が浮き上がるまで木炭で研ぎ落として、新しい面と同じ高さにする。高蒔絵は、漆と炭や粘土の粉を何層にも重ねて文様を作り、その上に金属粉の層をつくる。蒔絵の色彩を広げるために、砕いた卵殻や螺鈿などの装飾技法もよく併用される。

石川県立美術館には、17世紀に清水九兵衛の作とされる豪華な書見台や、初代・五十嵐道甫が制作した蒔絵と螺鈿で、月明かりに照らされた秋の野原を描いた文箱など、加賀蒔絵の名品が収蔵されている。